

『譚綴』

『

新月と蠟燭

るつそく

』



九谷
六口

落語にも、ちよつと恐いお噺がありました……

「オメー、ノツペラボーの話、知ってるかい」

「知ってるよー。それはこんな顔ですかっ、てんで振り返ったら、そいつもノツペラボーだったって話だろ」

「そーよっ。この話に続きがあるの知ってるかっ？」

「続き？ そんなの知らねーよ」

「そいつが顔をもどしたら後ろ側に顔があつてな、その顔が、ニカーツと笑つた、てんだ」

エー…… 静かな湖畔でという歌がありますが、静かな寄席でという歌は、まだありません。そのうち私が……

どうにも暗闇が恐くて仕方がない男がおります。

眠る時も明かりを点けていないと恐くて眠れない。夜遅く帰るときも明るいところを捜して歩きます。時間が掛かってしょうがない。目をつぶるのも恐いのですが、開けてばかりいますと目が乾いちやって痛くなります。さすがに、まばたきだけはせざるを得ない。

この時代ですから、別に幽霊が出そうで恐いとか、急にお化けが飛び出してきそうで恐いとか、そんなんじゃないんですな。ただ、暗いのが恐い。地方に出張し、夜遅く、真つ暗な田んぼのあぜ道を歩いた事がありました。膝は、ガクガク、齒はガチガチ。どうにも恐くて仕方がない。自分でも何故なのか不思議ですが理由がわかりません。

マンションの自宅で、ただヒッソリと暮らしています。自然、物事に神経質になりました。ガスは、火事になっちゃーまずいと思ひ、止めてもらっています。総て電気。玄関のピンポンも急に鳴るのでスイッチを切つていまして、周りからは、まるで幽霊のように思われています。

そんなある夜。たまたま新月の夜でしたが、どうした訳か停電になりました。

『オイ、なんだよ、電気が消えたよ。二十一世紀に停電か。真っ暗だ』
急にガタガタ、ガクガク。恐ろしくなってきました。

『東京電力様、東京電力様。どうか早く電気を点けてください』
祈りだしますが、電気は点かない。

『そうだ懐中電灯があった』

電池が少なくなっていたのか、弱々しい光。これでも、真っ暗よりは良い、と思いいほつとしていましたが、スーッと消えてしまいます。

『ガスを止めるんじゃないかな。ガスコンロの火でも良かったんだよ。明るければ恐くないんだから』

今更言っても仕方ない。新月、しかも停電ですから街頭なんかも消えて外も真っ暗闇。

『どうしよう、どうしよう。真っ暗だよ』

よるめきながら部屋を行ったり来たり。あぶら汗が出てきます。

『そうか、マッチがあったよ』

風が入ってはいけませんので、窓を総て締め切り、マッチを一本一本、擦っていきます。

『あと一本だつ。あと一本。待てよ、ローソクだつ。ローソクだよ。なんで気が付かなかったのかな。この前の出張で買ってきたのがあったよ。綺麗な和蠟燭。向こうの部屋に飾っておいたはずだ』

さっそく持ってまいります。江戸時代に作られたという立派なもので、胴の部分が少し細くなり、全体に菊の花が描かれています。綺麗なものですから飾っているだけ。火をともした事はありません。

『勿体無いな。でも、恐さには替えられない』

最後のマッチで蠟燭をとめます。

『あー、綺麗だなー。綺麗な炎だなー』

しばし、先程までの恐さを忘れ、蠟燭の炎を見つめています。

「慎之介様、慎之介様」
しんのすけ

どこからともなく、しつとりとした女の声が聞こえてきます。

『変だね。人の声が聞こえたけど…。女の声…？』

夜中に女性が訪れることなどありません。女性が、その気になり暗がり
に誘っても、暗がりに入った途端、ブルブル震えだしてしまいますので、
恋人など出来る訳がありません。

「慎之介様、慎之介様」

今度は、はっきりと聞こえます。

『しんのすけっ？ 誰だい、そいつは』

周りを見ても誰もいません。薄気味悪くなってきます。

「慎之介様っ、慎之介様。お栄を忘れですか？」

『今度は、お栄かっ。そんな人は知らない』

勇気を振りしぼり、声を出してみます。

「誰だか知らないけど、俺は、慎之介なんて名前じゃない。それに、お栄
なんて人も知らない。誰かと勘違いしてるんじゃないの」

「ホホホー、また、そんな事を言っつて、お栄を騙だまそうとしてるのね！」

「待ってくれっ、本当に、慎之介とか、お栄とか、そんな人たちのこと、
聞いた事もなければ会った事もない」

「お栄は、ずっとこの時を待っていたんですよ。三百年も……」

「さ、三百年っ。そんな大昔に俺は生きちゃいない。やはり俺じゃない。
勘違いだっ」

「あの日も、今日と同じ新月の夜でした。慎之介様は、お栄のことが好き
だ。でも、武士と町人は一緒になれない。いつそのこと二人で死のう。あ
の世で一緒になろう、とおっしゃってくれました。お栄は、嬉しくて嬉し
くて……。そして、雪の中、二人で山に行きました。寒かったー。でも、
もう少して一緒になれると思えば平気でした。真っ暗でしたが慎之介様と
一緒。恐くはありませんでした。それなのに慎之介様は、お栄を刺してお

一人で逃げてしまいました。お栄の胸には脇差が刺さったままでした。お栄の体は動かなくなりましたが、魂は、ちゃんと生きていましたのよ。

お栄は、叫びました、慎之介様ー、慎之介様ー。お聞こえになったでしょ。チラッと振り向かれました。耳に残られたようですね私の声。それから、暗闇がお嫌いになったと聞きました。お栄は、お逢いしたくて、お逢いしたくて……」

「何度も言うけど、俺は慎之介じゃない。確かに、理由もなく暗闇は怖いけど……」

「あなたは、慎之介様なんですよ。ご自分ではお判りにならないでしょうが、あなたの体には、慎之介様の血が流れているのですよ」

『慎之介の血が流れている……？ 先祖にそんな奴がいたのか。暗闇が怖いのは、そういう事だったのか……』

「女の気持ちは蠟燭の蠟に溶け込みます。お栄は、その蠟燭に溶け込み、待っていました。新月の夜、慎之介様が燈してくれるのを……」

お栄は、もう離れません。お栄は、慎之介様が大好きですから。これから、ズーっと、一緒ですよ」

近所の人が、昼間なのに明かりを煌々こわんこわんと点けているのを不信に思いマンシヨンの管理人に連絡します。彼の会社からも、三日も連絡なしに休んでいるけど、と管理人に電話が入ったばかりです。これは、警察にも連絡した方が良い、との事で警察立会いのなかで鍵が開けられます。

「警部、奇妙なおいでですね。ローソクの燃えた臭いと鉄のおいでです」

部屋に入り、皆、ビックリします。男が、血だらけになり死んでいるのです。

「警部……む、胸が開かれています。あー、心臓が抜き取られています。それにカラッポな胸にナイフが刺さっています。でも変ですね。自分でナイフを握っています。心臓は、どこに行っちゃったんですかね。誰かが持

ち去ったのなら血痕けっこんがあるはずですが……」

「部屋からは彼以外の指紋は見つかりません。鍵は総て内側から掛けられています。」

心臓も行方不明のまま。結局、迷宮入りになります。

その後のお栄を知りたければ、新月の夜、月をじーっと見てください。普段、お栄は、月の裏側にいますので、地球からは見えませんが、新月の夜だけ、こちら側に来ます。

「耳まで裂けた口に慎之介の心臓をくわえ、幸せそうに、ニカーッと笑っているお栄を見る事ができます。」

えっ、新月なんだから、空を見たってどこにあるか判らない。
簡単です。

和蠟燭を燈せば良いのです。

ただ、老婆心ながら付け加えておきますが、慎之介のような先祖がいない方に限りますよ。

お後がヨロシーようで……

譚
綴

「 新月と蠟燭 」

二〇〇一年十月十三日

編集・発行者

エムツー・プラデオ

三谷 弘

M²pladeo
Planning & Design Office

Copyright©Mitani2005

禁無断転載・複写